

幼稚園教育実習の時期の研究

— 実習園のアンケートを通して —

水引貴子¹⁾ 馬場千晶²⁾

¹⁾ 日本児童教育専門学校

²⁾ 昭和学院短期大学

A Study on Kindergartens' Preferred Periods for Practical Training

— From a Questionnaire Survey of Training Schools —

Mizuhiki Takako¹⁾ Baba Chiaki²⁾

¹⁾ Japan Juvenile Education College

²⁾ Showagakuin Junior College

抄録：本稿では、幼稚園教育実習における実習園へのアンケート調査を通して、幼稚園教育実習の望ましい時期を明らかにしようと試みた。1年次では11月、6月、10月に希望が集中し、2年次では6月、10月、9月に集中した。KJ法により理由をカテゴリー化してみると、園の行事が少ないとや子どもたちが落ち着いているなどの「園の都合」と、十分な実習前指導を期待していることや実習での経験の期待、就職活動を意識している「学生への配慮」の大きく二つに分かれた。さらに希望月と理由をクロス集計してみると、希望が集中していた6月は「園の都合」が大きく影響していたが、同じく希望の多い11月は「学生への配慮」も影響していることがみられ、その内実が異なることが明らかになった。

キーワード：幼稚園教育実習、実習時期、保育者養成校、実習指導、アンケート調査

1. はじめに

本研究は、二年制の保育者養成校である昭和学院短期大学（以下、昭短とする）の教育課程において、幼稚園教育実習（以下、教育実習とする）の望ましい時期について、実習園アンケートを通して検討するものである。

（1）問題の所在と目的

筆者らはこれまで、昭短の学生や実習園へのアンケート調査を通して、学生と養成校と実習園の三方において望ましい実習とは何かを追究してきた。

まず、入学して初めての実習である教育実習の事前指導の回数が3回と少ないことを課題とし、それ

を改善するために、一年次の実習時期を9月から11月へと変更することで回数を増やした。その後の学生へのアンケートでは、9月よりも11月のほうが満足度が高いという結果が得られた。^(注1)

次に、2年間で4週間という実習期間を一年次と二年次でどのように割り振るべきか、実習園と学生の双方にアンケート調査を行った。その結果では、2週間ずつよりも1年次に1週間、2年次に3週間という割り振り方が望ましいという結果が出た。^(注2)

以上を踏まえて、今回の研究では実習の時期について検討する。実習の期間は1回あたりおよそ1週間から1か月に渡ることが多く、養成校と実習園の双方にとって、年間のスケジュールに大きな影響

を及ぼす。よって、実習時期を設定することは慎重に検討せざるを得ない。それにもかかわらず、現在の実習時期を決定する方法に明確なルールや根拠がないまま今日に至っている。また、実習園はこれまで実習時期に関する意向が確認されないまま、養成校のスケジュールに合わせた実習時期を受け入れるか否かという二択しかない状況を一方的に迫られてきた。^(注3) 今回は、実習園による実習時期に対する意向を確認し、双方ができる限り納得する時期を本研究を通して探りたい。

(2) 先行研究

上記のように、実習時期の設定は養成校と実習園の双方において重要事項であるにもかかわらず、実習園を対象とした教育実習の時期に関する研究は、管見の限り見当たらない。

そのような状況ではあるが、小学校以上の実習を対象としたものはいくつかある。例えば、村井らの研究(2023)は、小学校での教育実習の在り方について学生にアンケート調査を行った。その中で、実習時期と期間について実習先の先生からどのようなコメントがあったかについて言及している。「9月ごろの実習だと運動会の練習ばかりになってしまふから6月がいいね」という学校行事に関するコメントや「9月に希望する学生が多いため、6月で助かった」という他校の実習生との兼ね合いについても触れられている。

また、松本(2019)は、高等学校の教育実習の課題をテーマとした研究の中で「教職課程教育実習連絡協議会」にて実習の受け入れの課題について高等学校の校長から意見聴取をしている。その中で、「9月と6月の実施のどちらが良いかと考えている。3週間の実習の場合は9月実施の方が、受け入れ教員の負担も軽いように思う。6月は高校での行事が多く、高校側の教員の負担が大きい」と、受け入れ時期に言及する言質を得られている。

実習の時期と学生の心理的負担の関連について、長谷川(2007)は、実習が1年次の前期にある学生(B1群)と後期にある学生(B2群)に対して、不安度を計測した。B1群は「事前理解」と「活動内容」に不安を抱えていることに対して、B2の方が実習への「期待度」が高いことが示された。B1群は入学

してから日が浅く、実習への事前理解がまだ乏しいため、B2群よりも不安が高く期待度が低いと言うこともできる。しかし、これはアンケートを実施した時期が前期の実習の直前であったため、実習の直前には不安が高まるということを単に示したとも言える。その対策として直前に何らかの実習指導を行う必要があるとまとめている。

以上のように、幼稚園教育実習の時期について実習園の意向を調査した研究は極めて限られていると言えよう。

2. 教育実習の時期

(1) 昭短の実習スケジュール

幼稚園教諭II種免許状と保育士資格を取得するための実習が、卒業までの2年間で5回実施されている。2年間で最初の実習は、1年次の11月に実施される幼稚園実習(1週間)である。この実習は、2022年度までは9月に行われていたが、事前指導の回数が十分に取れないなどの課題があり、2023年度からは11月に変更された。続いて、1年次の2月に10日間の保育所実習(保育実習I)、2年次の6月に10日間の施設実習(保育実習II)、夏休みに2回目で3週間の幼稚園実習、11月に10日間の保育所実習(保育実習II)が行われている。

(2) 他校の実習時期

昭短の所在地が千葉県市川市であるため、同じく千葉県北東部の他の二年制の幼稚園教諭養成校の実習時期と比較したい。

A短期大学においては1年次の11月に1週間の観察実習を行い、2年次の5~6月に3週間の教育実習を行う。B短期大学においては、コロナ禍での実習実施期間がそのまま採用されており、1年次は4月~12月の期間に分散的・断続的に実施(2週間分)を行い、2年次では10月中旬~下旬に2週間の実習を行っている。

さらに千葉県内にある短期大学データ収集が十分に行えなかっただため、これらの比較データに加え、神奈川県内の同じ二年制短期大学の保育士・幼稚園教諭養成校との比較も行った。C短期大学は1年次は11月に1週間、2年次は5~6月にかけて3週間の実習を行なっている。

同じく神奈川県のD短期大学では1年次と2年次は2週間ずつであるが、時期はそれぞれ11月と6月になっている。1年次の実習時期の選定には理由があり、前期に付属幼稚園での授業内実習が関係する。学生の春休みと夏休みなどの長期の休みを利用し、1年次の「保育所保育実習Ⅰ」と「施設保育実習Ⅰ」、さらに2年次の「保育実習Ⅱ」または「保育実習Ⅲ」を実施しているため、空いている期間として2年次の6月を「教育実習（幼稚園実習）」期間としているという現状であった。

上述の調査をもとに改めて昭短と比較すると、他の短大の実習時期は1年次は11月、2年時は5～6月実施が多いことに対し、昭短は1年次が11月、2年次が9月実施と、時期が若干ずれている。それぞれの大学の事情もあるが、5～6月ごろに実施して「早めに実践経験を積ませたい」傾向か、もしくは夏以降9月ごろに実施し「じっくり準備を整え、より深い実践を目指したい」傾向かの違いと見られる。実際に受け入れる園側はどのような時期が望ましいと思っているのかを、アンケートを元に調査を進めしていく。

3. 研究の手順

（1）アンケート調査

昭短のこども発達専攻1・2年生が2023年度に実習を行った千葉市、柏市、松戸、船橋、市川市、鎌ヶ谷市、印西市、四街道市などにある66園を対象とした。実習園66園を対象に、2023年11月20付でアンケート用紙を郵送し、記入後に返送してもらう形で実施した。

内容は、1年次と2年次の望ましい実習時期について記入したうえで、任意に選択理由を記述すると

いうものである。

（2）分析の手順

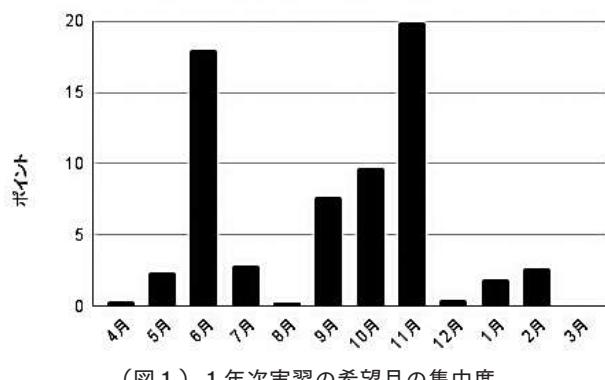
まず、希望する月の集計を行った。一つの園で複数の月を選択した場合は、重み付け方式でカウントした。例えば、二つの月を選択した場合、その二つの月に0.5ポイントずつを加える。このようにして、全園の合計重みが一致するよう調整した上で、各月ごとのポイントを算出し、希望の集中傾向を明らかにした。

次に、任意で記入した理由を付箋を用いて抽出し、KJ法を用いてカテゴリーに分類し、ラベリングを行った。

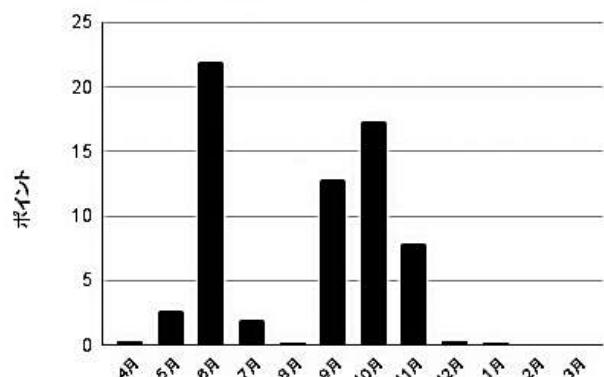
最後に、希望月とKJ法をもとにカテゴリー化した理由とを関連付けるクロス集計を行った。こちらも希望月のカウントと同様に、重み付け方式を採用した。例えば、ある園が二つの月を選択したうえで理由も二つあげていた場合、0.25ポイントずつ二つの月に加算される。

（3）倫理審査

本研究は、昭和学院短期大学倫理委員会の承諾を得ている。また対象者には本研究の目的と方法を口頭と文書で説明した。調査への協力は自由意志に基づくものであること、協力に拒否しても不利益はないこと、データは匿名化した上で使用すること、得られたデータは本研究以外には使用せず、本研究終了後に破棄すること、アンケートの回答をもって本調査に同意したとすることを説明した。



（図1）1年次実習の希望月の集中度



（図2）2年次実習の希望月の集中度

4. 結果

(1) アンケートの結果

1年次の実習時期においては、11月を望む園が最も集中し、6月が続いた。その次に10月、9月と集中する。一方で、3月が最小となり、8月と4月が続いた。(図1)

2年次では、6月に最も集中し、10月、9月と続いた。一方で、2月と3月が最小で、8月が続いた。(図2)

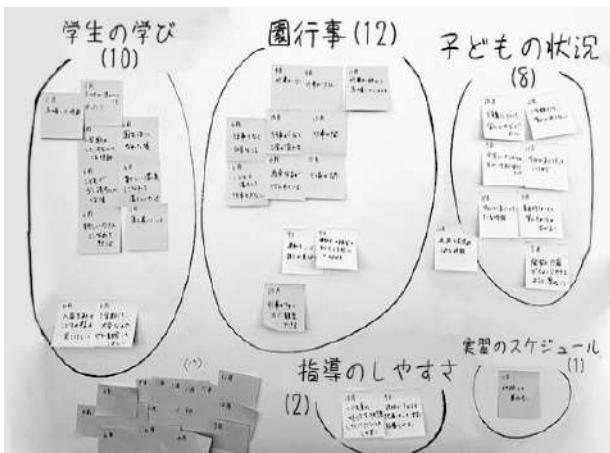
希望月の理由に関する自由記述の回答率は、1年次2年次とも72.2%だった。

(2) KJ法の結果

記述された理由をKJ法にて分析してみると、1年次・2年次とも、「実習園の都合」もしくは「学生への配慮」のどちらか、または両方の理由で実習月が選択されていることが明らかになった。したがって、「実習園の都合」と「学生への配慮」という二つのカテゴリーを設けた。さらに、それぞれの理由をラベリングしてみると、以下のような結果となった。

まず、1年次における「実習園の都合」というカテゴリーの中には「子どもの状況」、「園行事」、「指導のしやすさ」、「実習のスケジュール」とラベリングでき、「学生への配慮」というカテゴリーは「学生の学び①」と「学生の学び②」とラベリングできた。(図3)

以下、ラベリングについて説明する。まず「実習園の都合」の中の「子どもの状況」は、子どもが園の生活に慣れたり、行事が少ないなどで落ち着いて



(図3) 1年次実習の希望月の理由

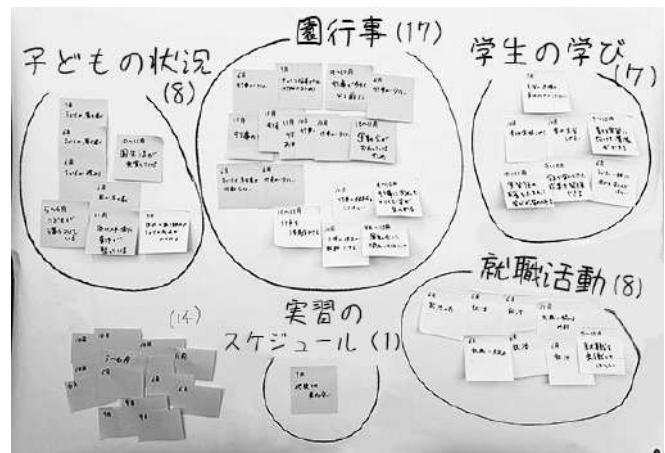
いるという状況を指している。「園行事」は、運動会や遠足などの園の行事が少ないということである。次に、「指導のしやすさ」は、選択した月が担任が子どもを把握している時期などで、実習生にアドバイスしやすいというものである。「実習のスケジュール」は、他の保育者養成校の実習生の受け入れと重ならないという意味である。

「学生への配慮」の中の「学生の学び」に関してはいくつかの観点が見いだせた。まず、「学生の学び①」は「保育を十分に学んでからが良い」といった、学生の「学びの準備」を期待するものである。「学生の学び②」は、「座学の内容がイメージできるように早めに実習をした方が良い」という「学びのつながり」を意識したものである。

次に2年次における「実習園の都合」というカテゴリーには、「園行事」、「子どもの状況」、「実習のスケジュール」がラベリングでき、「学生への教育的配慮」のカテゴリーにでは「学生の学び」、「就職活動」とラベリングできた。(図4)

以下、ラベリングの意味を説明する。「実習園の都合」の各ラベリングに関しては、1年次とほぼ同様の意味である。

次に「学生への配慮」の「学生の学び」は1年次と同じく複数の観点を含んでいる。「学生の学び①」は1年次と同様である。「学生の学び③」は、実習中に行事やクラス運営など特定の物事を学生に経験させたいという「教育的期待」がある。「学生の学び④」は責任実習に言及したものである。このように「学生の学び」に関しては複眼的な選択理由が存在することが明らかになった。



(図4) 2年次実習の希望月の理由

1年次のコーディング		
カテゴリー	ラベリング	コード
実習園の都合	子どもの状況	新入園児も進級園児も新しいクラスに慣れてきている/子どもがやつたり落ちついた時期
	園行事	行事が少ない 行事と行事の間であるため 2学期と3学期は行事が多い
	指導のしやすさ	子どもの特性を把握していくアドバイスしやすい 年度初めは指導が難しい
	実習のスケジュール	実習を受け入れる他校との兼ね合い
学生への配慮	学生の学び① 学びへの準備	基本的なことを学んでからが良い 学びが身についている時期として 1学期だと学びが足りない
	学生の学び② 学びのつながり	座学の内容がイメージできるように早めの 実習が良い

2年次のコーディング		
カテゴリー	ラベリング	コード
実習園の都合	子どもの状況	子どもが落ち着く時期 子どもが慣れてくる時期
	園行事	行事が少ない 運動会や遠足の時期と重なる 実習生にアドバイスしやすい 運動会時期に実習生がいると助かる
学生への配慮	実習のスケジュール	実習を受け入れる他校との兼ね合い
	学生の学び① 学びの準備	夏休み中に準備してほしい 学んできてから行事を経験してほしい
	学生の学び③ 教育的期待	担任の取り組みや子どもの成長が見られる 子どもと一緒に遊びを楽しんでほしい
	学生の学び④ 責任実習	責任実習を設定しやすい
	就活活動	就活の前に見極めてほしい

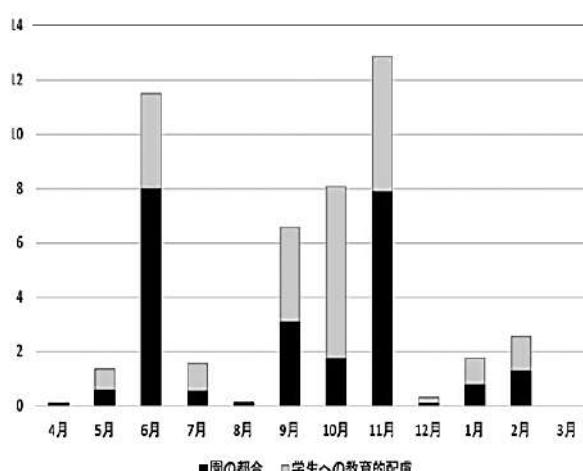
(表1) KJ法による1年次2年次の実習の希望月の理由分析

最後に、「就職活動」は2年次特有のラベリングである。「就職の見定め」「就職先として意識してほしい」という意味を含んだものとしてラベリングされている。

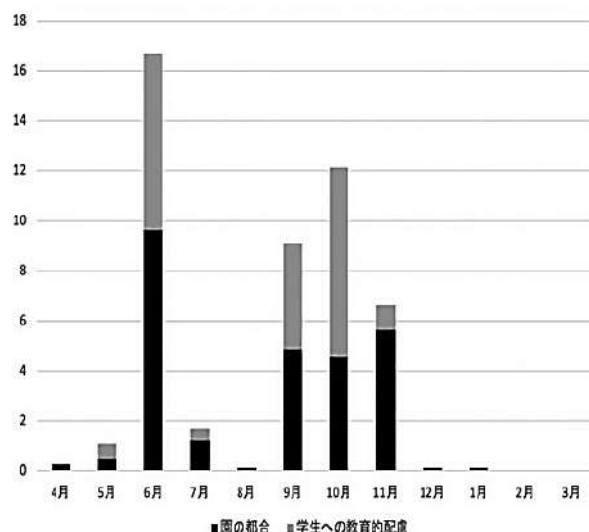
以上のKJ法において分析したカテゴリーと導き出したラベリングをまとめたものが表1となる。(表1)

(3) クロス集計

先のKJ法において明らかになった「園の都合」と「学生への配慮」の大きなカテゴリーが、月ごとにどのようなバランスで見られるかという分析を試みた。



1年次において、まず言及された理由数が最も多かったのは11月、次いで6月であった。一方、最小の順は3月、4月、8月となる。さらにカテゴリー別にみると、「園の都合」が最も多く挙げられていたのは6月、次いで11月、9月となった。「学生への配慮」に関しては10月が最も多く、11月、9月と続いた。(図5)一方2年次は、全体的な言及数において6月が最も多く、10月、9月と続く。一方で、最小の順は、2月と3月が同数で、次いで8月となつた。「園の都合」は6月が最も多く、11月、9月となった。「学生への配慮」については、10月が最多で、6月、9月となった。(図6)



(図5) クロス集計による1年次の実習の希望月のうちわけ

5. 考察

(1) 両学年実習の全体的な希望傾向

どちらの学年も4月、8月、3月の実習は避けられている。この理由として、4月は入園もしくは進級したばかりであること、8月は夏季休園中であること、3月は卒園や進級の準備があることなどが要因として考えられる。

そして、両学年とも6月の希望が集中していることが共通している。これは、1年次は1週間、2年次は3週間という実習期間を実質的に確保しなくてはならないという点から、行事が少ない6月が選択されるというのは理にかなっている。特に3週間というまとまった期間が必要な2年次では、1年次よりもその傾向が強まったと考えられる。

さらに共通事項として「園の都合」である「園行事」が理由で、1年次、2年次とも6月と11月が多く希望されていた。「園行事」の捉え方として、行事が少ないことを良しとする園と、行事が多いからむしろ良いとする園で意見が分かれた。主に前者は1年次の希望時期に、後者は2年次の希望時期に多かったことから、1年次の実習は落ち着いた時期に指導したいという傾向、一方で2年次の実習では保育者としてより現場の仕事を体験してほしいといった傾向が伺える。

このように考察を進めていくにつれ、実習の希望月の理由について、年次別の傾向違いが明らかになってきた。以下1年次、2年次についてそれぞれ考察していく。

(2) 1年次実習の希望傾向

11月と6月に希望が集中しており、理由の言及も多くなっている。どちらの月も「学生への配慮」よりも「園の都合」による理由を多く挙げている。しかし、それぞれの月の「園の都合」と「学生への配慮」の比率を見てみると、11月のほうが6月よりも「学生への配慮」の割合が高くなっている。よって、11月の方が6月よりも実習生の学びに実習園の意識が向いているということが言える。

これは、1年次は実習期間が1週間と2年次よりも短いため園のスケジュールに与える影響は比較的小さく、それよりも保育の初学者と捉えてまずは学校での学びを深めてから実習に臨んでほしいという

実習園の意向の表れだと考えられる。同じ傾向が10月に強く出ている。この「学びの準備」に関する記述は2年次に比べて1年次が多く見られる。

(3) 2年次実習の希望傾向

実習期間の希望理由に「就職活動」を挙げている点が特徴的である。理由を「就職活動」のためとした園は多くが6月を選択しており、これは学生が就職を意識し始める時期としてこの時期が重要な節目となることを見越した意見であることが伺える。実際に私立幼稚園では、6～7月に園見学や説明会を実施し、8～9月に採用試験を行うところが多く、その前に実習で見定めてもらいたいという園の意向が受け取れた。

また、1年次にはなかった理由として「学生の学び」の中に「責任実習」への言及が散見された。2年次の「責任実習」は実際に子どもたちを前にして計画・実施・振り返りを行う実践的な学びの場であり、『幼稚園教育要領』では「単に「指導案どおりに活動を進める」ことに留まらず、現場の保育者との連携や臨機応変な対応力が養われる機会となる」とある。

加えて「行事を経験してほしい」など、教育的な期待を込めて行事の多い2学期を希望する園も見られる。教育的な期待が読み取れる1年次では「観察する」や「見る」などの文言が多く、観察実習を意識しているのに対し、2年次には「経験」や「体験」など、上記の「現場の保育者との連携や臨機応変な対応力」の醸成を意識した文言が見られた。

6. さいごに

本稿では実習園へのアンケートを通して、二年制の保育者養成校における幼稚園教育実習期間の望ましい時期について検討した。

昭短についていえば、一年次の11月の実習はおおむね実習園の意向とも合致しているが、二年次の実習に関しては6月もしくは11月を検討してもよいと思われる。

今回は幼稚園を対象にアンケート調査を行ったが、今後は保育所にも同様の調査を行い、比較したいと考えている。

7. 謝辞

本稿を執筆するにあたって、ご協力くださった学生の皆さんおよび実習園の保育者の皆さん、そして2023年度より昭和学院短期大学にて「幼稚園実習指導」をご担当の片桐恵子教授に心から感謝を申し上げます。

注

- 1) 抜稿（2023）、（2024a）を参照。
- 2) 抜稿（2024b）を参照。
- 3) ただし、地域によっては個々の大学が個別に実習時期を定めるという方法ではなく、幼稚園協会といった団体と、その地域の複数の大学が「実習連絡協議会」を定期的に開催し、実習時期に関して協定を結んでいる。

参考・引用文献

- 大阪府私立幼稚園連盟（2020）『実習ガイドライン』
長谷川比呂美（2007）「保育実習に関する学生の意識について—実習不安を中心として—」『淑徳短期大学研究紀要』第46号

馬場千晶・水引貴子（2024a）「本学こども発達専攻における幼稚園実習の時期に関する研究—アンケート調査を通して—」『昭和学院短期大学紀要』第61号、pp. 1-8
松本直樹（2019）「教職課程における『教育実習』の今後の指導課題について～「理論と実践の往還」の視点から～」『教育・教職に関する論文集』静岡理工科大学教育開発センター

水引貴子・馬場千晶（2023）「本学こども発達専攻における実習指導の課題—幼稚園教育実習の時期について—」『昭和学院短期大学紀要』第60号、pp. 43-53

水引貴子・馬場千晶（2024b）「二年制保育者養成校における幼稚園実習期間の検討—実習園と学生へのアンケート調査より—」『敬心・研究ジャーナル』第8巻第1号、pp. 27-34

村井尚子・宮崎元裕・森久佳（2023）「教育実習の時期と期間についての検討—2020年度入学生への調査結果を基に—」『京都女子大学教職支援センター紀要』第5号、pp. 79-90

受付日：2025年11月10日